



若い同窓の皆様を お待ちしております

同窓会長 久本 甫

本日は釧中、湖陵同窓会総会に多数お集り下さいまして有難度うございます。集りにも色々ありますが、同じ門をくぐった者、湖陵魂に育まれた者、の集りは、和やかで親近感を覚え、会も酣ともなりますと、独特のものが感じられます。

我が同窓会総会は例年八月の第二日曜と決まっております。これは当初、お盆の頃には、地方におられる方々も帰郷されるだろうから、出席し易いのでは、と云う事で決まった次第ですが、時代が移り、レジャーの世の中ともなれば観光シーズン真っ盛りの八月、航空券が、列車の切符が、手に入りずらいとの事で、秋に行つてほしいと云う希望もきかれます。市内の他高の同窓会も大体八・九月に集中しておりますが、総会時出席された方々から、アンケートをとって調べるのも、無意味でもなさそうです。

今年度は東京と札幌の同窓会総会に出席し、その折、感じました両方の同窓会運営に共通する悩みを申し上げます。それは年に一度の



文武両道の伝統は いまでも脈々と

学校長 笹山 平

七月七日のことですが、宮内庁書陵部から三人の歴史の実録の専門家が来校しました。昭和天皇の実録編集のための資料調査という用向きでした。昭和天皇は、戦前二度釧路に見えられたようです。初めは、大正十一年、大正天皇の摂政として来釧（行啓）し、富士見の釧路中学校の校庭に桜の植樹をされたという記録があるそうで、この時の桜の木は今どうなりましたかという質問が出されました。これには応待にあたっていた永田先生も驚いて、のちほど調べてみますという返事に、三人の来校者の表情に一樣に失望の色が浮かびました。昭和天皇が皇太子時代とは言え、自らの手で植えられた桜の木が今では関係者さえ承知してないばかりかその存在さえ不明とは……。それから、ひとしきり、湖陵という校名の由来や校歌のこと、校歌の作曲者が「海ゆかば」の信時氏であること等話題にのぼりましたが、宮内庁書陵部の前編集課長で高名な歴史学者である橋本義彦氏が本校の卒業生であることを発見して恐れ入ったとい

総会への出席者が減少している事です。その原因は、高齢の先輩の方々の出席が年々減少し、その減少分に見合うだけの若い方々の出席者がいないという事です。東京では今年度の新卒者を無料招待にしました。しかし出席者はたったの一名。宣伝方法に問題があったのか、それとも若い人には同窓会は無縁なのか。又札幌では、一番若い期で十九期の四十五才で三十代は出席者がゼロと云う事です。この事態を解消するには、出席者のターゲットを若い世代におき、その年代層に満足してもらいう様な企画で会を運営し、総会の懇親会を催す必要があると思われま

す。幸い釧路の総会は若年層の出席が増えております。これは偏えに、当番期の皆様方の努力によるものと感謝する次第であります。と共に、どうか友人・知人をお誘いの上、一人でも多くの方々に参加いただき、同窓会のよき、総会の楽しさを知っていただきたいと思ひます。

では皆様、ビールで乾杯！

前編集課長で高名な歴史学者である橋本義彦氏が本校の卒業生であることを発見して恐れ入ったとい

う様子を見せていました。橋本義彦氏は大正十三年生まれ、東京大学国史学科を卒業後宮内庁に入り、この三人の方の大先輩にあたるということでした。前書きが長くなりましたが、湖陵高校の近況をお知らせします。平成 6 年度の大学進学状況は、北大合格者数が大幅に減りましたが、本州の国公立大合格者数と併せると総体として善戦健闘と評価できるし、私大進学についても同様の結果です。しかし、今後のことを考えると不安材料や課題が眼前に立ちただかつております。特に、英語・数学等の基礎学力が入学時から低下している現象が見られることで、学校週五日制の実施を目前にしてこれらの学力をどう引き上げていくかが大きな悩みです。今 3 年生の中には、早期の始業前の時間を使って補習を行うなど、生徒も先生も精一杯奮闘している姿も見られます。部活動については、大半の部が全道大会に駒を進めました。全国大会に出場する部は女子ハンドボール部・陸上部 6 名です。文武両道の合い言葉は今も健在です。

支部だより

釧路

釧路市職員湖陵会活動報告



釧路市職員湖陵会幹事

川上三郎
(湖陵21期)

市の職員で構成する同窓会は多々ありますが、その中で湖陵会は設立が昭和47年、実に20年以上も活動が続いています。

「何故か、他の同窓会が廃会もしくは休会となる中で「何故か」と考えると、それは「全てにおいて適当」に運営を進めながらも「会員を大事にする」この言葉につきるのではないのでしょうか。

その秘訣は……
一、会員は職員のみとし、決して政治の世界の人はいれない。
一、会員同志の親睦を旨とするこ

と。
一、お金に余裕のある範囲で母校の発展に積極的に協力すること。
一、会員のお祝い事、悲しみ事は形で気持ちを表すこと。
一、会員であることが重荷にならないこと。
一、やはり肩の力を抜いて親睦を第一に活動することが長続きの秘訣ではないのでしょうか。
この様な会でありますので、普段は存在感があまりありません。しかし、年に一度だけ、会員が会員であることを否が応でも自覚する時期があります。それは6月の

ボーナス支給日です。
この日は庁内に配置された30名の幹事さんが情報網を駆使、年会費を徴収します。しかし敵(会員)も然る者、4月の異動で新しい職場に移ると、網の目からはずれる場合があります。

こういった会員さんは、幹事さんが職場で年会費の徴収を始めたから、「見ザル、聞カザル、言ワザル」、ひよっとして会費を払わなくて済むのではないかと、皆さん嵐がすぎるのをじっと待つ様に静かにしているのです。

ところが、こういった淡い期待も訓練された幹事さんの手にかかると、ボーナスの支給日には難?を免がれても後日必ず発見され、無事会費を納めていただくことになるのです。

もっと驚くことは、新採用の会員さんです。採用されて二ヶ月、やつと職場に慣れ、落ちつきが出た所へ、鬼の幹事さんが「採用、おめでとう。湖陵高校卒業の人は皆さん湖陵会の会員です。二千元いただきます。結婚すれば祝い金も出ますよ。」と言葉たくみに有無を言わず会員としてしまうこととです。

何かひどい会の様に思えるでしょうが、これも安い年会費で總會、祝い金の支給、果ては親の同窓会への協力と、何かと物入りなため

でございます。

多少おおげさに表現しましたが会員の皆さんは心よく協力していただいているのが実態です。くれぐれも誤解なさらぬ様に。

さて、ここで会の近況と役員紹介をさせていただきます。

今年の総会は、4月22日、久本同窓会長、笹山校長、工藤市議会議長、蝦名市議会議員のご出席をいただき、会員四百名中八十名の参加により盛大に開催されました。しかし、ある会員曰く「出席者が少ないな」実は幹事にとつてこれが一番ツライ言葉であります。稲津会長も「幹事が率先して参加、会員をたくさん参加させる様に」という御沙汰を出している訳ですが、幹事としては二百名が参加すると会の運営が成りたたくなくなるかといつて御沙汰が気にかかる。この様な複雑な思いで迎えるのが総会なのであります。

また、長年の懸案であった同窓会館建設のために、すでに会員の協力で貯えた積立金があります。どうか、有意義に使用いただきたいと思います。

最後になりましたが、役員のご紹介をいたします。
会長は、市政と財政の要一稲津 順一収入役。
副会長は、市民の窓口一波多野

市民部長。

円滑な議会運営一高杉

勇吉議会事務局次長。

監査は、市民の台所を預かる一

永田淳一財政部長。

事務局次長は、行政の監視役一関

口政司監査事務局主幹

事務局長は、港灣の発展、釧路

の発展を担当する柳澤

慶三港灣部次長。

代表幹事は、国体開催担当一

中 谷藤和スポーツ課長。

そしてこれらの役員を支えているのが最前線で一番苦勞の多い30名の幹事さん方です。

今後も役員一同、協力して母校の発展のため、職員の親睦のため苦しいやりくりの中頑張ります。決して「同情するなら金をくれ」(家なき子より) などとは申しません。しかし、会の発展にご協力いただければ、すぐに「名誉会員」としてお仲間に入っていたたく用意はあります。お気軽にお申し下さい。大歓迎いたします。

最後になりましたが、同窓会の益々の発展と皆さま方のご健勝をお祈りし、筆をおかせていただきます。



同窓会報「くまざさ」再刊30号を顧みて

編集委員長
元教職員湖陵会会長
上岡 信明



●復刊のおもいで

年二回発行を継続して十五年、茲に本号をもって30号になり、初号から携ってきて、

実に感無量である。多くの方々のご協力ご鞭撻あつたればこそと、茲にあらためて心から感謝申し上げる次第である。

同窓会長で釧中第一回生、釧路市教育委員長で湖陵梅楓塾頭であつた中川久平先輩が、昭和34年7月23日付創刊号で、発刊の御挨拶で述べておられる。「年令や社会的地位や職業等を超越して、互に助け合う会が同窓会だと思ふ。助けあうとは何か、その答は簡単です。即ち湖陵を母校にする者が、学びそして遊んだ往時の童心に還つて御互におつきあいすることです。」と、そして副会長で釧中12期生の米内富久司先輩が、既に同窓会館建設を叫んでおります。米内印刷の刊行でした。

ところがその後休刊がつづき、幻の同窓会報と言われ十五年が過ぎていきます。

釧中32期で第八代組村真平同窓会長と、湖陵4期で当時の遠藤隆吉幹事長が会報復刊について、同窓会の動きを広報するために話し合われていたようでございます。丁度この頃の事務局は、全員が湖陵高出身者の期で、釧中から湖陵

へと変わって更なる躍動を感じさせる顔振れの時代になっておりました。

当時会員四百名をかかえ、同窓会の推進母体であつた教職員湖陵会代表の釧中26期生、第九代田村佳男会長と談合があり企画し、親

会が編集委員をつくらせて行うのが理想だが、異業種の間々が数度の会議をもつことは不可能に近く、

教職員湖陵会がその責務を引受けることとなり、教職員湖陵会役員が早速委員を構成、別葉写真の顔々の六名他が編集子となつたのである。会報が軌道に乗るまでの

期限付でスタートしたわけであつた。実作業は私が中心窓口であつた。親会からの配当費30万である。

再刊第一号は、末広二丁目、今もある「栄屋旅館」の一階食堂内で協議され、二月末発行予定であつたが、集稿に手間がかかり意に反

して、昭和55年4月1日に綜合印刷発行となつた。所詮素人の仕事と痛感したが復刊第一号の感激は一入であつた。これに懲りて第二

号は早目に着手。なにせ8月の総

会発行が命題であつた。頁数は八頁。下段の広告あつめは殆んど市内外の情報にくだしい遠藤幹事長の御努力にかなり大変お手数をおかけした事を今も深く思い感謝している。

編集窓口も、筆者から徳田・藤原(文)・豊島・若原・吉井氏と引継がれ22号から再び私になる。

内容と大体定形になつて来ていて、脱却したく思うが諸氏の御指導を賜りたい。特記すべき内容として、釧新に連載した後刊行本となつた「釧中物語」の筆者釧中

32期生奥田達也氏の(青春譜・湖陵ヶ丘)も20数号まで、毎年夏・春二回発行にご執筆いただいた御

尽力に深甚なる敬意を表したい。時は平成に移り、湖陵2期、長内宏同窓会長の三年八月の總會で特別委員会設置の提案と経過報告

があり、「くまざさ」刊行は広報委員会専任の編集をみとめられ、本来の同窓会広報とし活動しはじめ、今日の30号発行を喜びの中で迎えたのである。



「くまざさ」復刊に協力せし当親会と教職員湖陵会メンバーの顔 S54 秋

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

釧路パシフィックホテル

中村 隆(釧中27期)

釧路市栄町2丁目6番地 ☎24-8811

れんが屋★AM 11:00～PM 11:00

トロイカ★AM 8:00～PM 11:00

パシフィックイン・八まき・八宝園

活躍する同窓生

北大通の老舗鶴屋の前で、コーヒー道場「しなもん」の看板を存じの方は沢山いらっしやるでしょう。

48年の開業以来、頑固なまでにこだわる「美味しいコーヒー」を入れ続けてきたマスターが「シヤケの会」事務局長であることを存じの方も多いでしょう。

しかしながら、氏が心理学の講師として教壇に立つことをご存じでしょうか。

今回は湖陵16期、小杉和寛氏に寄稿をお願いしました。

そう思いませんか

(湖陵16期) 小杉 和寛

「かつて、自分が子供だったことを覚えている大人は少ない。」

サン・テグジュペリの「星の子様」の冒頭の台詞だ。

私に言わせれば、この世界的な言葉は間違っている。大人になれたって事は、実は誰でも、かつて子供であった時分(自分)を、内面に抱え込んでいるんだよ、と言いたいと思います。もちろん

現在進行形で。

この「内なるガキ」を活かしているか、半殺しの目に会わせているかは、今の自分に現れているように思います。

昔の人がいいました、「少年の志(こころと読んでください)」と老人の知恵(を合わせ持つことが望ましい)と。

今も学生時の友人と話し出すと、つい徹夜になってしまふ。その時代は私の原点になっているからなのでしょう。

その頃に培った認識は、その後(今のことですが)どう育ち、どう変わったのか。友人との会話の中で、己のスタンスを確かめられるから。

日常の心積もりとしては、他人に対して、わりと腹藏無く接しようとしている積もりでいるけど、やはり、それぞれの人によって響き具合が違うようです。

自分の視点の欠落している部分を空かさず突いてくる友人を無くせはしません。

子供の時代、または、今の自分の中の子供の部分を大事にしたいと思っているのは、きっと、いいガキだったからなのでしょう。

「お前が、いいガキだったとて」とすぐさま反発されそうです。他人様にとつてではなく、自分にとつての話です、と、付け加えさせて貰わなければならぬでしょう。

なぜ私はガキを大事にしたがるのか、といえば、様々な発想できるのは、タガの外れたときであると言う事を48にもなると思つてい

るからなんだと思います。多くの人(質においても、数においても)に接するのは苦痛ではありません。しかし、私が出会う人の中には、自分が自分である事を苦痛に感じている人もいます。



いまいち、充足感を感じられない人達です。

そういう傾向の人達に共通するのは、自由な発想性が欠如していると思えるところがあります。

自作のものか、既製のものかは分かりませんが、パターン化(自律してしまつた習慣的、固体的認識パターン)した発想しな

くなつてしまつていようと思えます。もつとも、その質を、自分は常識を大切に作る人間なのだとして、建て前を守る人もいます。

自分の中に打ち立てられた。こうすることは当たり前。そう考えるのが当たり前。という権威を持たされ、支配されてしまつた人は

奴隷のように見えることもありま

す。このタイプの人達のするタガのはずし方は破滅的に見え、自由な感じはしません。さて、すっかり前口上が長くなつてしまいましたが、せつかく与えられたこの稿で言いたいことは

釧路の街のおもしろさについてであります。前述したような意味では、この地の風土性は因習、伝統の力は強いとは思われません。だからといって自由の気風が強い、とも言えないように思えます。只、その可能性はまだあると思

います。だからおもしろいことに夢中になれる時間、空間、人間が取り揃えられた地域に成るべく、地域の特性を理解していくことから始めなければならぬようでしょう。具体的には、今、環境のことが問題となつていきます。しかし、

私がおもうに、環境と、対を成すのは、主体という概念です。

即ち、(エラそうにいつてゴメン)環境問題とは、人の生き方、ライフ・スタイルがテーマの問題であると考えていかなければなら

ないものだと思います。幸い、私たちの時代は物が豊かであれば人間、幸せになれる、という考え方からは解放されています。

人としていかにあるのが結論な話しになるのか、というテーマを論ずるに釧路の風土性は役に立つと思うのですがどんなものでしょう

か。この夏は大変に暑いものになりました。植物の育ち具合は目覚ましいものです。生き物として、その存在が持つ潜在的可能性を発現してくるのを見ることは何よりも興味深いことです。



編集委員会では、広く活躍する同窓生の皆さんの記事を募集しています。同期で、先輩後輩で、今活躍している同窓生をご紹介ください。

奥田 達也(真高1期)の

誠愛勇から

山本 久の巻

(釧中第13期)



十八年前に『釧中物語』の取材で十三期の十数名にお集まりを願った。釧路信用金庫本店の会議室。ときの理事長が十三期の渡辺彌太郎であったから。今は山本寿福。すでに釧路新聞の連載は十三期生に入っており、島森忠男だけの分が数回すすんでいた。「なんで島森ばかりが……」と誰かが先に言い出した。「私の恩師だったもので……」と謝り乍ら答えたとき、「それなら良いさ」とすぐに山本久が助けてくれた。十九期先輩の

取材となると闇夜の前に引き出された按配で恐ろしいもの。

在学時代の話から始めたが、

「俺は煙草を喫んでいたので親父に火事でも出されてはかなわんから隠れずに喫め、といわれたよ」と切り出して、紳士然としている同期生に悪童ぶりの暴露をすすめてくれる。

修学旅行の釧中生態に襲わる事件も「その場に居合わせなかつたが……」と前置きして言い出してくれた話で、絶えず若輩の取材者に気を遣い、一座の話を面白く

次々とすすめてくれた。山本久が面目躍如として釧中生に知られるのは、釧中第一ストライキの泥棒事件”であろう。

釧中ストで泥棒も辞せず

豪放なうちに他人への気配り

「どうだ、やっぱり、俺が適任だろう」と腰の手拭をひき抜いて、

恩師を思う五年生徒(十六期)が昭和七年、佐藤修一校長に抗してストに入り、厳島神社社務所に立て籠った第一夜。

別室に集まった先輩らがストの取捨策をこらしている時、中心人物の中川久平が、

「校旗を奪い、此処を教室としてストを正当化しよう。さつき俺は

失敗した。白昼ではどうにもならない。今夜、誰か泥棒をやってくれ。この通りだ」と畳に両手をついた。沈黙が続く。柱時計が鳴った。誰もが心の中で数えている。「もう十時か……」と山本久は時計を見上げ「一丁、泥棒をやるか……」

中川門下の四天王・小甲幸一ら一同が山本を見つめる。

「みんな、俺の顔を見るなよ……泥棒ツラだといいたいんだろ」と久は高笑いした。「うん、権兵衛、本当にやってく

れるか？」と中川が見つめる。山本久の仇名は、大正初期の総理大臣・山本権兵衛からきている。

「うん、権兵衛、適任だ。俺が必ず骨を拾うぞ」中川は笑つてうなずいたが、その目に涙が光っている。

ときはすでに十一時をすぎた。九月下旬の月は青白く冴え渡り中天にかかる。釧中の校舎は白く

浮かあかて見えた。その頃の学校の窓は、釘が一本刺しているだけの戸締りである。山本は難なく窓を開け、校舎に入る。すでに心は座っていた。靴をぬぎ、廊下を急ぎ、校長室の前に立つ。だが此処だけは固く錠のかけられたドアであった。

校長室に通ずる職員室のドアなら入れるかも知れない、と考えた彼は職員室の引き戸を静かに開けようと手をかけた。その途端、いかにも泥棒よけの仕掛けでもあるように異様な金属のきしむ音を発したのである。

シーンと静まりかえった長い廊下は大きな共鳴音を響き渡らせた。ガラリと宿直室の戸が開いた。頭からスツツと血の気の引く思いがして山本は直立不動をした。逃げ去ることはできなが取返して動かない。逃げれば本当の泥棒になる、後輩達のため、母校愛のため……との自負が落着きを取り戻させていった。

ストを心配し宿直室にいた五年担当の三人の教師らに対面したところへ玄関の戸を叩く中川久平。(以上の釧中ストについては当記者・釧中十六期・中江孝司著「私の釧中事件簿」より抜萃。多謝)

剣道範士の山本は釧路魚市場の専務を務め、今なお孫と剣を振う。



太陽のように
明るく暖かい真気で
良い品をより安く
ご奉仕する

セオチェーン

- 妹尾商店 新橋大通1丁目 ☎25-5345
- 新富士ストア 新富士駅前 ☎51-3467
- 愛国ストア 愛国西3丁目 ☎36-3399
- 白樺ストア 白樺台1丁目 ☎91-5423
- 昭園ストア 昭と北1丁目 ☎51-8853

さつぽろ地下街オーロラタウン
ギフトブティック

ペルソナ

オーロラプラザ前 ☎(011)241-3830

●味が自慢の本格派レストラン●

ステーキハウス アポロン

新橋大通1丁目妹尾商店向 ☎25-7023
営業時間/AM11:00~PM9:00

当番期紹介

(湖陵高校12期)

種市 徹



支部も誕生して、事あるごとに交流が行われている。

来年、卒業後三十五周年を試え、札幌支部が当番幹事になり、定山溪で祝賀会を開く予定になっている。

我々の期の特徴を一口に述べよう

「三五会」―我々十二期生の会の呼称である。

昭和三十五年卒業したことで、つげた会の名称であるが、非常に単純でわかりやすく、みんなから親しまれている。と同時に一つの利点は、卒業以来何年経ったかが、すぐ出てくることである。

よく、他期の方から、「あなた達の期は、組織はできているし、団結心があつて、よろしいですね。」とよく羨ましがられるが、その通りと思う。

昭和五十二年に第一回の同窓会が開かれて以来、毎年絶える事なく十八回目の同期会を本年迎える事になるし、その間、単独の同期会としては珍しく東京支部、札幌

徒会としては、甲子園応援のため

の経費保留で、北見予選に応援団を送らず大失敗をしてしまう。山本は現在、野球の解説をしているので御承知であろう。

変わったところでは、埋蔵博物館や湿原展望台を設計し、

最近日本の建築界で新風をまきおこしている毛綱も同期の仲間であり、現在計画中の同窓会館の設計を行っている。同窓会館は旧校舎の時代からの懸念であり、彼のユニークな建築物を早くみたいものと期待している。

た、高校野球道予選がはじめて南北北海道に分かれた年で、寺岡、木村の左右の両投手と本塁投手の山本を擁した全盛期であった。甲子園出場を信じて疑わなかった生

「湖陵に長し四十年の……」の応援歌が、「七十年……」

に変わり、時の経過を感じるが、母校愛はいつも変わらず、心のより所になっている。これはどの期も同じであろう。年に一度の再会の場を有意義なものにと、当番期としてがんばるつもりである。



KUSHIRO SOU PRINTING

知性と工夫で勝負する情報集団

釧路総合印刷株式会社

〒065 釧路市白金町19の2 TEL 0154-23-9201 FAX 0154-23-9205



「社会人一年生」として

湖陵46期 岡田 由美子

平成六年、私は四六期生として湖陵高等学校を卒業しました。そして、社会人としてスタートをきり始めたばかりです。学生生活での集団とは、まったく違う、社会という和の中で、これから生活していかなければならない不安や戸惑いは、入社して、数ヶ月が過ぎようとしている現在のほうが、卒業して間も無い頃より、よりいっそう強く感じています。今までは同じ年の人達や、私と何年も変わらない人達の中で、生活をしてきたけれども、今度は、私の倍もの人生経験をつんできている先輩方の中で、仕事をしているのです。たくさん、覚えなくてはいいけないことや、初めて学んだことや、誰かが私の変わりに、やってくれるだろうという考えを、もって生活していけるのは、学生までの話で、社会にでてしまうと、できません、とかわかりませんが、黙っていても、誰も相手にはしてくれないのです。自分から積極的に、行動し、答えを見付けたらいいかなければ、何も始まらないのです。人に頼って生きていくことは、と

ても、楽なことだけど、自分にとって何も利益になることはなく、誰からも、社会人として、認めてもらうことはないのではないかと考え、今までのような、学生生活の延長に社会人として生活があるのではなく、社会人一年生としてまたあらたな一歩を、確実に踏みだしていこうと思います。

私が、社会人として、もつとも気をつけていることは、人との約束は、どんな小さなことでも、必ず守るようにしています。そこから、少しずつ、信頼関係を育てていこうと思っています。必ずしも信頼関係が生まれるとは、かぎらないけれども、私なりに、一生懸命に、社会にでて働いて、社会人一年生なりに、貢献していこうと思います。

最後になりましたが、私は社会人一年生として、無理もせず、背のびをしないで、じっくり確実に一歩ずつ、社会人として成長していきたいと思っています。

学窓を巣立つ



「社会人になって」

湖陵46期 谷口 敏子

今までの私にとっての勉強というのは、国語や数学など、机の上で学ぶ勉強だったのに対し、今年社会に出た私の新しい勉強というのは、常に責任のつきまとう仕事の数々や、正しい電話対応や、接遇などといった、実践を伴う、体で覚えていく勉強に変わりました。

初めの頃は任された仕事を言われた通りにやる毎日でしたが、物珍しさも手伝って、仕事をするとというのは楽しいことばかりのように思っていました。しかし、少しずつ自分の考えで仕事をしようになつていくにつれ、今までの生活ではそれ程感じたことのない責任というものをひしひしと感じるようになり、いつまでも高校生だった時のようにはいられないのだと改めて思い知らされました。ただ、それだけ責任を伴うぶん、きちんと仕事ができたと

できなかつた気持ちだと思っています。私が会社に入る前、一番気にしていたのは仕事のことよりも人間関係についてだったので、よいけない心配だったと思つた程すぐ馴染むことができましたし、一緒に入った同期の人達も楽しい人ばかりで、節目節目の選択が、結構いい結果になつてると自分で思つてしまう位、今は充実した毎日を送れていると思います。

三年生になつて、大学進学と就職のどちらが自分にとつてプラスになるのか、かなり悩んだのですが、今は就職を選んで本当に良かったと思つています。

私が会社に出て、まだほんの数カ月程度しか経っていませんが、早く自信を持って仕事ができるように、これからもたくさんのお話を学び、吸収して、少しずつでも成長していけたらと思っています。そのためにも、毎日の生活の中の一つ一つが勉強のつもりで、頑張っていきたいと思っています。

生活を送っていたら感じることを

釧路のおみやげに！

しあわせをお菓子にのせて



蜂蜜手焼せんべい

熊ささ



釧路市南大通2 ☎代41-2121

湖陵同窓会役員

会長	久本 甫 (湖陵7期)
副会長	遠藤 隆吉 (湖陵4期)
副会長	本間 秀一 (湖陵6期)
副会長	北明 正紘 (湖陵10期)
副会長	山本 寿福 (湖陵8期)
副会長	原 轟戸 (湖陵7期)
幹事長	関口 政司 (湖陵10期)
会計長	佐藤 文昭 (湖陵20期)
監査	坂上 洋治 (湖陵3期)
監査	割方 道子 (湖陵3期)
監査	神 崑躬 (湖陵8期)

大竹副会長退任

同窓会の副会長として活躍いただきました大竹正さんは転職のために退任いたしました。本当にご苦労様でした。

北明副会長就任

このたび、同窓会の副会長として、教職員湖陵会より北明正さんが副会長に就任されました。鳥取西小学校長です。どうぞ、宜しくお願いいたします。

編集委員会だより

◆編集後記◆

同窓会々員の皆さんには日頃から大変お世話になっております。当編集委員会の委員から期限ぎりぎりの寄稿を依頼された先輩、後輩、ご同輩も大勢いらつしやるのではないかと思います。本当に「困ったときの神頼み」ではありませんが、原稿を求めてさまよい歩き(ちよつと大げさですが、そんなときもありますよ、ホント)

先輩の後輩の同期の方(!?)なんて、複雑な関係を手繰り寄せ、ではお願いしますその瞬間「いいよ、やつとくから」の一言を発し

先輩(後輩)のお姿は、正に後光がさして見えるものです。どうか親愛なる我が湖陵同窓の諸氏にあつては、当編集委員会の委員がお邪魔した折、「誠・愛・勇」の崇高なる精神に基づき(こんなときに校割が役立つとは;)、何卒特段のご高配にあずかりますよう予めお願いする次第です。

そんな訳で編集委員会では広く皆さんからの情報や寄稿をお待ちしております。同窓生へのお知らせはもちろん、昔話や同期会情報、活躍する同窓生の話など何でも結構です。どうぞお気軽に事務局、編集委員会にお話しくださいれば、早速取材にお伺いします。

さて、長年にわたって母校の活動を伝えていただいております和田信幸先生(湖陵4期)が退職され、新しく笹野晟士先生(湖陵14期、現在、母校で英語を担当されておられます。)に引継いでいただくことになりました。これまでの和田先生のご労苦に心から感謝申し上げますとともに、笹野先生にはこれから様々な面でお世話になるとおもいます。どうぞ末長くお願い申し上げます。(石川記)

八月は同窓会の総会の月、毎年当番期の方々の御苦労で盛会裡に挙行されます。毎年、夏を体感せぬうちに、暦は立秋をすぎてしまします。朝夕、楽になつたかと思うと日が短くなり、郊外では虫の音がしげくなり、まさに秋がしのびよつて来るのです。ところが今年は少し様子が違うようで、鉦路に盛夏が訪れたようです。

さて、この度の「くまざさ」編集に当たりましては、原稿依頼が短時日にも拘らず、お願いいたしました皆様には、早速、玉稿をお寄せいただき、このように無事発行の運びとなりました事、深く感謝いたします。

関係各位の御配慮もあり、兎にも角にも「くまざさ」が、特別委員会設置もあつて記念すべき、30号を発行するまでに至り、編集子一同快哉を叫んでおり感無量、誠にめでたいことです。(上岡記)

富士見の旧湖陵高校周辺はどうなつたのかと思ひ立つて寄つてみました。

久寿里橋のたもとにあつた鉦路公共職業安定所が今年移転し、堀酒店の向かいにあつた富士見会館も跡地に立ち、舗装道路も走つている。校舎入口にあつた東家は富士見会館跡地に移つた。

何か、しつくりこない。「ここには玄関が、ここには廊下が、体育館が」と思うせいか、あらためて広い敷地だったのだなあと感慨深い。

市道をはさんでの市営球場は古かったが緊張感があつた。いつも終盤がもつれ、あのパン売りのじいさんは高校野球のときは、あまりスタンドに売りにこなかつた。札幌南高のように、よみがえつてほしいとは思ふ。が。(平野記)



くまざさ編集委員会
 同窓会会長 久本 甫
 同窓会幹事長 関口 政司
 編集委員長 上岡 信明
 編集委員 奥田 達也
 平野清次郎
 石川 和男